

令和3年度 第100回 全国高等学校サッカー選手権大会埼玉県大会 総評

報告者：高体連技術部 細田学園高校 上田健爾

新型コロナウイルスの影響で、観客制限や感染症対策を行いながらの開催となった令和3年度第100回全国高等学校サッカー選手権大会埼玉県大会が8月22日から11月14日の期間に開催された（1次予選 8月22日～29日、2次予選トーナメント 10月9日～11月14日）。2次予選トーナメントは、関東プリンスリーグに所属している昌平高校と、U18埼玉県リーグ（Sリーグ）に所属している23校に加えて1次予選を勝ち上がってきた28校の計52校によるトーナメント方式で実施された。優勝は西武台高校、準優勝に浦和南高校、3位に立教新座高校と武南高校という結果となった。西武台高校は11年ぶり4度目の優勝で、12月28日に開幕戦を迎える全国高等学校サッカー選手権大会への切符を掴んだ。

1) 優勝チームについて

優勝した西武台高校は埼玉県1部リーグで首位に位置し、関東大会本大会では強豪を抑え優勝しており、今大会も優勝候補筆頭にあげられていた。各チームから対策される中、優勝を勝ち取った強いメンタリティーは見事であった。今大会では、インターハイ埼玉県代表の正智深谷高校やプリンスリーグに所属する昌平高校が3回戦で敗れる波乱の展開の中、初戦となった2回戦、花咲徳栄高校を8-0、3回戦、埼玉栄高校を2-0で寄せ付けず勝ち進み、準々決勝では堅守の武蔵越生高校に2-1で競り勝ち、準決勝では先手必勝策が功を奏し武南高校に4-0と圧勝し決勝に駒を進めた。決勝戦は浦和南高校のPK狙い策のペースの中苦しみも自力の差を見せ延長戦1-0で競り勝ち栄冠を手にした。

西武台高校は1-4-4-2の中盤ダイヤモンド型のシステムを基本とし、相手チームの特徴や自チームのメンバーのバランスを考慮しながら1-4-2-3-1のシステムに変更して戦っていた。攻撃時は2トップへボール集め、そこで前向きを作り、サイドへ展開してクロスボールでゴールへ迫る傾向が強かった。クロスボールの質やシューターの入り方は非常にレベルが高く、数多くのチャンスを作り出した。決勝戦のゴールもクロスボールからの得点であった。個人としてはFW⑩市川が起点にもなり、ゴールも決められる選手であったが、その下に位置するMF⑭和田が相手にとって掴みづらいポジションを続けることで、味方選手を活かす形となっていた。また、途中からの出場にもなることがあったFW⑪細田やFW⑰松原も活躍しており、選手層の厚さは勝ち上がりに大きく影響した。

一方、守備は2回戦から決勝戦の計5試合で許した失点はわずか1失点であり、終始安定した守備を構築した。特にSB③安木・⑤原田、CB⑥武笠・⑮河合の4バックは個人の守備的能力も高いが、終始切れない連携を保ち相手に立ち入るスキを与えなかった。また、チームとして攻撃から守備への切り替えが速く、ボールに近い選手が素早くアプローチに行き、奪い返すので、相手コートでの試合展開を可能にしていた。

2) 準優勝チームについて

準優勝となった浦和南高校はチームとしての戦い方が明瞭で、チーム全員が徹底して遂行してくることで相手にダメージを与えていった。その統一度や自信は勝ち上がるにつれて高まっていった。オーガナイズは1-4-4-2で、CB2人は高さがあり、両SBは簡単には1対1の突破を許さないので強固な守りを築くことができる。浦和南高校の守備をさらに強固にしていたのはMF⑧奥村だ。豊富な運動量と卓越した予測力を持ち、決勝戦でも西武台高校の攻撃の芽をつんでいた。この強固な守備からカウンターが攻撃のコンセプトであろう。このカウンターは鋭く、大会中何度もチャンスを作った。中でもMF⑩大里は今大会屈指の突破力であった。

ボール保持時は意図的に高いボールを相手陣地に送り、セカンドボールを拾いチャンスを作ることが多い。この攻撃も先に述べたようにチームで徹底されており、相手に脅威を与えた有効な攻撃と感じた。

3) 大会を通して

前年度は3バックを採用するチームが増えた印象であったが、今年度は4バックを採用するチームが多かった。また、守備時と攻撃時で立ち位置を変えたり、試合中にシステムを変えたりと、可変的にシステムを活用するチームが増えていた印象もある。

また、今大会の大きな特徴となったのは、優勝候補チームが早々に敗退したことであろう。その背景には、トーナメントという精神的な難しさは言うまでもないが、分析力の向上やフィジカルの向上があったのではないかと考えられる。上位チームへの対策強化が進んでおり、県予選を勝ち進むことが難しくなっていることは県全体のレベルアップにつながるであろう。

4) 最後に

昨年に続き、今大会も新型コロナウイルスの影響で満足のいく準備が整わなかったチームや選手も少なからずいたと伺っている。その中で各チーム創意工夫し選手の成長に尽力いただいたこと。また、あらゆる感染対策の下、選手に練習の成果を発揮する場を与えてくれた関係者すべてに感謝申し上げたい。

また、会場での応援内容も制限されるなかで大会を迎えることになったが、声援に変わる手拍子や拍手、試合後の相手選手や指導者と交わされる挨拶、会場役員への声掛けなど、例年以上にサッカーができる喜びと感謝の気持ちが表現された大会であったと感じている。

全国大会でも西武台高校の活躍と高校生の心からサッカーを楽しむさわやかな光景が見られることを期待している。